

仙台にゆかりのある三人の優れたドイツの学者たち

- ヘリゲル、レーヴィット、ジンガー -

第3部 クルト・ジンガー

ヴォルフガング・ウィルヘルム

かつて少年が  
あこがれ、くりかえし思いめぐらしたこと  
夢、いやはるかなる夢のまた夢  
それがこの男に成就された

1931年4月。大きな期待に胸をふくらませた一人のドイツ人が、ハンブルク港をあとにして日本へ向かった。いかにも小づくりのきゃしゃな体つきは、日本人と称してもそのまま通りそうなほどであった。当年45歳、明晰に澄んだその眼差しには喜びからくる興奮の色がさしていた。遠く異郷の地へとかれを誘(いざな)ったのは、旅することへの憧れとか何がしかの冒険への夢想とかいったものにつきるのではなかった。そこには学者としての知的好奇心がはたらいてもいたのである。経済学を数年にわたって講ずることを求める、東京帝国大学からの招聘状を、かれは身に携えていた。ハンブルク大学経済学部助教授クルト・ジンガーなるこの人物は、この光栄な招請に応じるため、大学当局から長期の休暇をとりつけたのであった。ジンガーは、財政政策、通貨政策のエキスパートとして一目も二目もおかれており、経済評論家としても広く世にその名を知られていた。イギリスの高名な経済学者であるJ・M・ケインズとは友人の間柄にあった。世は全世界的な経済危機の時代である。インフレ政策デフレ政策についての専門家であるこのヨーロッパ人に、日本の招聘者たちは事情に通じた助言者の役割を期待したのである。

ながい間はぐくんできた願い、それがとうとうこの旅人になえられようとしている。「精神的な目覚めの時以来、極東のこの島国はあたかも磁石のようにわたしを引きつけてやまなかった。芸術においても日常生活においても厳格な形式の支配する国。武士と僧侶の国。かれらは詩人でもあり、また茶人でもある。花のような女たちの国。高雅で毅然とした容姿そのままに、彼女たちは犠牲的行為の何たるかを知っている。あくまで敬虔に守り抜かれてきた風俗が支配しながら、事を行いまた耐えるに際して鳥のような軽やかさを示しもする国家。それはまた、堅固な体制的基盤に立ちながらも、おどろくべきこだわりのなさでその対極のものへ、すなわちかれらが無と名づけるものへと身を翻していく。しかもそれはあくまで連続的な移行として理解されているのである」(1) 若年20歳にしてかれは『ノイエ・レントシャウ』誌でフラカディオ・ハーンの著作『こころ』を感激をこめて紹介していた。そのなかで

かれは生け花を、律動的な形式美の支配する日本的生のシンボルとみなしている。花器に生けられたひと枝の花さながらに、かつての日本では各人が、「人間と木石とが銀糸によって一つに織り上げられたその織物」のうちへと、「道理に適ったしかたで」織り込まれていたのだ、と(2)。この織物とてそこかしこ虫食いにやられるようになってからすでに久しいことだろうし、いまでは外部からの力によるばかりはいえない作用によってずたずたに引き裂かれようとしているのかもしれない...、そういう予感をもとより当時のかれもすでに抱いてはいたのだが。

クルト・ジンガーは、 - - 上のわずかな引用からもすでに見て取れるように - - たんなる学者ないし大学教師ではなかった。かれはひとりの文学者でもあったのであり、すぐれて詩人的な素質・天分に恵まれていた。シュレージエン地方出身のユダヤ系商人とイギリス人女性との子供として 1886 の 5 月 8 日にマグデブルクで生をうけたこの人物は、ものごころのつくつかないかのうちから文学に愛着をおぼえるようになっていた。青年時代には、とりわけて哲学や美術史、ギリシア文学に深く魅せられていた。それに応じて、大学での研究も広い範囲に及んだ。1904 年から 1910 年までの間かれはジュネーブ、フライブルク、ベルリン、シュトラスブルクの各大学で哲学、経済学、社会学、文学、美術史の研究に没頭することになる。卒論に経済学を選んだのは、本来の関心からというよりは、将来の生活設計を考えてのことであった。しかしながら、文学と精神科学への思いはけっして消え去ることはなかった。自分にとって最も大切な教師としてかれは同時代の二人の偉大な思想家の名をあげているが、それは、哲学者であると同時に社会学者でもあるゲオルク・ジンメル(1858-1918)と美術史家のハインリッヒ・ヴェルフリン(1864-1945)なのである。ジンメルのうちには、「人物と著作との、深遠さと日常性との裂け目のない緊密な融合」(3)を見て取ることができる、そうかれには思われた。それに深く魅了されてジンガーは 1905 年から 1909 年にかけてこの学者のベルリンでの講義をすべて受講したほどである。かれが貨幣に関する経済理論への道を歩むことになったのも、1900 年に出版されたジンメルの著書『貨幣の哲学』に影響されてのことであった。貨幣理論の研究はシュトラスブルク大学のゲオルク・フリードリッヒ・クナップ(1842-1926)に就いて徹底して行ない、インドにおける貨幣改革についての論文により 1910 年に博士号を取得した。この指導教授たるクナップの貨幣創造説およびその人柄にジンガーはなみなみならぬ感銘をうけている。けれども、シュトラスブルク時代におかれるかれの人間形成のうえで最も重要な出来事、かれの精神の内奥に深く達する体験は、それとはまた別のところで生じていた。それは、詩人のシュテファン・ゲオルゲ(1868-1933)との出会いである。

ジンガーはすでにジンメルを通じてゲオルゲに注目するようになっていたが、ゲオルゲを中心としたサークルにかれを実際に導き入れてくれたのはかれの学友のひとり、のちにドイツのラテン文学研究の重鎮的存在となるロベルト・クルティウス(1886-1956)であった。これよりジンガーはこの詩人ゲオルゲの心からの忠実な信奉者となり、それは終生変わることがなかった。すべての偉大な精神的潮流がこのひとりの人間において交差しあっており、そこを中心にしてひとつの球状空間を形づくるに至っているのだ、 - - こうかれはマルチン・ブーパー宛の 1916 年の手紙で感激をこめて書いている。この崇拜

し手本とする人物の詩作活動、アポロ的調和の支配するギリシア精神、辛辣な時代批判からかれはみずからの思索と行為にとっての規範をわがものとした。だがまたそれにとどまらず、自分の思い定めたとすじの道を一途に突き進み、そこに待ち受ける運命はこれを毅然とした態度で甘受する、という精神の力をもかれは師から受け継いだのである。

職業生活を開始する時点では、かれの特異な運命を暗示するようなものはまだなにもなかった。ハンブルク銀行の頭取であるフリードリッヒ・ベンディクセンのもとで助手を数年勤めたのち、1920年にジンガーは、前年に創設されていたハンブルク大学において『前号としての貨幣』という著作により教授資格を取得した。当時ゲオルゲはドイツ国民が社会的、精神的の両面にわたって覚醒し生まれかわるべきことを強く説いており、ゲオルゲ・サークルに属する者のなかには、偉大な師のこの理想に政治的な基盤を確保することを目指してアカデミズムの世界に進んでいった者が数多く存在する。ジンガーもそのひとりだったわけであり、将来を約束された学者としての生活が待ち受けているかにみえた。1924年には助教授に任命された。その一年後にはケーニヒスベルク大学から経済学担当の教授として招聘されたが、かれはこれを蹴っている。多方面にわたる関心と教養を備えたこの気鋭の学者は、1927年にミュンヘンで出版されることになる著作『始祖プラトン』に取り組んでいたのである。この本は、ゲオルゲ精神に影響されたハインリッヒ・フリートマン（『評伝プラトン』、1914）やエドガー・ザーリン（『プラトンとギリシア的ユートピア』1921）によって開始された新しいプラトン解釈の流れに棹さすものであり、この偉大なギリシア哲学者のうちになににおいても理想的な生活形式の具現された姿をこそ認めるべきことを説いている。数学的問題を扱った章は、数をめぐる神秘学・象徴学に抱いていたジンガーの学問的関心が明瞭に見て取れるような解釈を軸に展開されており、今日でも識者のあいだで注目されている。

アルベ川を下って北海に向かいつつある船上で日本に思いを馳せていたときのジンガーには、いま自分にとってオデュッセイアの旅が始まろうとしているなど知るよしもなかった。ハンブルク大学での職に復帰することも故国たるドイツに永住することももはや二度と許されない境遇へとかれを引き連れていく流浪の旅が…。なるほど、数週間ののち到着した東京で、ゲオルゲからきていた手紙、「長旅」の無事を祈ってくれている手紙を手にしたときには、さすがにかれもいささか感傷的な気分にとらえられはした。とはいえ、この言葉のうちに期せずして自分に未来を予言するものがあつたことにジンガーが思い至るのは、ずっと後のことになる。ひと月ほどの船旅は、かれには長いなどはまったく思われなかったのである。

東京での住み始めは、思っていた以上にやっかいで気苦労の多いものであつた。自分はこの新しい生活環境からまったく疎外されている、そうジンガーには感じられた。いま思えば、出発の前の晩、ハンブルクの日本総領事は笑いにまぎらしながらも、日本でわたしを待ち受ける種々の困難についてあらかじめ心の準備をつけさせようとしてくれていたわけだ。かれはたしかこう言っていた…、「あなたは日本で、いろんな意味でわたしが 無秩序における統一 と呼んでいるものに出会われることでしょう」 -

-。それにしてもはじめのうちは、至るところ無秩序のしるしばかりでジンガーは戸惑いこそすれ、根底に存する統一なるものなどまるで認識できなかった。かれがこの謎めいた言葉にふくまれている真理を実感できるようになるには、まだまだ時間が必要だったのである。くだんの外交官は付け加えて言ったものだった。「興味を駆り立てるようなものにはしばらくのあいだ出会うことがないでしょう。でもそれうち突然に稀有のもの、貴重なものに対する目が開かれることになりますよ」。この言葉もまぎれもない真実であることがのちに明らかとなる。

すでにドイツの国家体制および経済は国の内外を問わない停滞と緊張のはざまに「暗然たる混乱」の状態にあった。他方、みずからを「神国」と称するこの日本という国家は「より切迫した不安」と「身をさいなむ一層の消耗」とりつかれているようにジンガーの目には映った。ジンガーはこう書き記している。「当時首都東京は泥沼の不況にあえぎ、擾乱の予兆が暗く影を落としていた。実際数か月ののちにはいわゆる満州事変が勃発している。この首都からみるかぎり、対立する諸勢力に引き回されているこの国は、あたかも乱雑な実験室とかかわるところがない」(4)。当時、政治的状况は先鋭化しており、一触即発の観を呈していた。1930年に浜口首相が狙撃されている。かれはそれがもとで一年後に死亡した。満州への侵攻に勢いついて軍国主義、偏狭な愛国心、テロリズムが蔓延した。1932年には犬養首相が軍部による暗殺の餌食となった。秘密結社に加わった青年将校たちが軍人魂なるものをさかんに称揚し、民族主義的感情を煽り、騒乱を扇動するさまを、その後数年にわたってジンガーも見聞きすることとなる。かれは力にものをいわせた非道の横行をただ遠くから感じとっていただけではなかった。1935年にかれは、東京帝国大学の同僚である篤実な憲法学者、美濃部達吉が、名声の失墜を狙った誣告を受け免職に追いやられた一部始終をまのあたりにしているし、さらに1936年には、ジンガーを評価し信頼もしていた大蔵大臣の高橋是清が超国家主義者たちの凶弾にたおれている。これはいわゆる二二六事件の一環であり、クーデターによる権力奪取を目指して反乱を起こした東京の第一師団は、ほかにも数名におよぶ閣僚を殺害している。不安を募らせつつジンガーは、与野党を問わず政党が年ごとに国民の信頼を失っていくさまを、あるいは、農産物価格の急落と重い小作料とに苦しむ農民たちが日増しに不満の声を高めていくさまを見守っていた。

とはいえジンガーには、日本の国家を揺るがし、それを破滅的な危機へと追い込んでいる政治的な暗い情熱もさることながら、伝統的な精神的倫理的宗教的実質の喪失がそれに勝るとも劣らず危険に満ちたものに思われた。このような喪失をかかれは至るところで感じ取っていたのである。日本は自己分裂に陥ってしまっており、それとして見分けられるような「骨相学的統一」(5)をもはや欠いている、というまさにこの事態こそが、かれにいわせればその政治的経済的窮状のより一層深い原因なのである。個人的な手記のなかでジンガーは、滞在のはじめの2年間で得た印象をみずから要約して次のように書き記している。「わたしはこの国の賛美者のひとりであったわけだが、この首都での過ごし始めの日々は、知識人たるわたしの心にやるせない悲しみをよびおこしただけだった。なにもフラカディオ・ハーンの日本に出会えるなどと思っていたわけではない。それはかつては実際に存在していたのかも知れないし、

あるいははじめから伝説上の夢幻の世界だったのかもしれない。いずれにしても、いま現在の日本がそれとは別物であることなどとうから予想していた。大地震とそれに続く火災で文字どおり廃墟と化した街をほとんど人間技とも思えない意志の力によってほんの2、3年で復興してしまうほどだから、なにがしかのせちがらさとか貧欲さとかいったものを目にするようになるだろうぐらいのことはあらかじめ覚悟していたし、移入されてからまだ2世代を経たばかりの西洋文明が、昔ながらに残っている土着の生活形式といろいろなところで摩擦に陥っているだろうことについても同様である。ところが、実際はそんな生易しいものではなかった。建造物、服装、社交上のしきたり、思考様式等、どれをとってもそこにはまったく無秩序な混淆しかなく、どれもこれもわずかばかりの魅力も備えていない。新奇なものが不格好にのさばっているといった体のものだ。いまだ秘められている非凡なものの存在を予感させるようなかすかな痕跡といったものすらどこにも認められない。異国から来た者にとってはすべてが悪夢以外のなにものでもない」(6)。あるいはまた、別の個所では次のように書いている。「東京で見たり感じたりできるものといえば、経済や社会、国家を運営統御する西洋的技術のうわずみ、どろりと凝固したうわずみだけである。それらを日本人はたしかに勘どころを押さえた、きわめて巧みなしかたで東洋的条件に適合させてはいる。しかし、ヨーロッパ人たるわたしの目からすれば、すべては実質を欠いた急場しのぎの代用品にすぎない。ところがこの国の人々にとってはそれらは自己賞賛・自己満足の種であり、自分たちは西洋世界と東洋世界とをより高い総合へと融合せしめたのだという思い込みのよりどころとなっている。かくしてそれはかれらにとって、自分たちには世界を支配する正当な権利があるのだという主張を裏づけるための新たな切り札の役目を果たすまでになる。だが実際のところは、自国日本の宗教や文学について型どおりの決まり文句以上のことを答えうるような者はほとんど皆無であった。たしかにごく少数の例外的人物のことを忘れてはならないにしても...」(7)。

当時頻発した政治テロ以上にガンジーが懸念したのは、それらゆゆしき事件を国民が無関心に受け入れてしまっているという事態であった。精神というものがまるで麻痺してしまっているように見受けられたのである。かれは書いている。「この事態に気づくのは容易なことだった。たとえまだこの国の言葉を50と知らない者にだってそれと知れた。ひとびとの目と振る舞いが十分すぎるほど物語っていた。若者たちの顔には張りがなかった。正気を失った亡者よろしく、なにを見聞きするにしてもそこからただひたすら神経を麻痺・弛緩させるための刺激を得ることだけを考え、そのあげくが一層のいらつきをもてあまして醜く顔が歪んでしまっている、そんな者も少なくなかった。エロ・グロ・ナンセンスという言い回しが、合言葉のようにもてはやされた時代である。まさに、エロチックでグロテスクで無意味なものによってひとびとの日常生活が一色に塗りつぶされているようにみえた。その一方で、暗い情熱にとらえられた青年たちは共産主義的な秘密結社に加わり、果てしない議論あるいは二転三転する実行計画のなかで次第に直接行動への衝迫を募らせていた...。年配の者たちは途方に暮れ、すべてに懐疑的になり、優柔不断に陥っていた」(8)。この描写にはまぎれもなく、ジンガーの東京帝大の客員教授としての経験が反映されている。このような混迷する時代にあってもしかも緊張をはらんだ政治状況のなか

で大学での職務を果たすには、はじめの予想をはるかに上回る骨折り、気苦労が要求された。のびやかな批判的精神をもち、容易には妥協しないジンガーのような人間にとって、日本の第一級の大学におけるさまざまなしきたりにみずからを適合させたり、アカデミックな教授活動の枠を越えないよう自制したりするのは、けしてなまやさしいことではなかったのである。かれは、あたりさわりのないお茶をにごすような話では満足しない、その意味では厳しいうるさ型の教師であった。たとえばかれは、 - - 自身ある手紙で述べているところによれば - - 授業で学生が幾何学的な精確さを備えた、「消費税、経済弾力性等々についての説明」を述べ立てるだけではよしとせず、さらに「マックス・ヴェーバー流の社会学的定義」に熟達することも学生に望んだ。学生、同僚の多くはこのようなかれの人となりが高く評価し、かれが着任してくれたことに感謝の念を抱いていた。ジンガーがヨーロッパ人としては例外的に小柄であったことも、日本人と親しく交際することにおいて有利に働いていた。かれ自身よろこんで日本人の間に立ち交わり、その生活を共にしたのである。特別視されることを望んで尊大な態度に出るようなことは、かれにはついぞなかった。

大学の外でもかれは助言や意見を乞われることが多かった。とはいっても、かれが伝えたいと思うメッセージは、たいていの場合、実際に聞き入られることはなかったが、1931年から1932年にかけての冬にかれは、財界の大物たちを前にして或る講演を行った。そこでかれは、性急な経済発展を求める傾向を軽率なものとして戒め、それが自国文化の存立を危うくすることを説いた。「目的と手段を相応のものに押さえる賢明さがあればね日本は必要とするものすべてを難無く手に入れることができるというのに...と、当時のわたしには思われたし、いまでもその考えに誤りはなかったと思っている。偉大な将軍家康に典型的にみられる、あの待つことをよしとする古来からの精神の力さえ保持されていれば - - 。だが、そのような節度を促すわたしの考えは、利益を求めてひたすら突っ走ることしか頭にない者たち、あるいはものを考えようとしない固陋な国家主義者たちのあいだに理解を得ることはできなかった」(9)

「無限の進歩というドグマ」に嫌悪を覚え、また、新たな「鎖国的態度への逆行」や、「極端に個人主義的なものと極端に集団主義的なものとのあいだを振り子のように揺れ動く、精神の無政府状態に悩まされながらも、かれは、日本的世界に生きることが機縁となって、より深く学問研究に沈潜するようになり、また西洋と東洋という二つの世界を視野に収めつつ人間と文化についてあらためて思索をめぐらすようにもなっていた。「一見したところでは混沌として人を惑わす曖昧さに満ちているうわべの現象の背後に、日本的生の秘められた法則をかぎあてること、これは実に刺激的な作業であり、わたしの精神を魅了してやまない」(10)、こうかれは書きつけている。かつておのれのうちに憧憬の念を呼び起こしたいにしえの日本をかれは求め続けた。そしてそれは十分に報われたのである。「あきらめずに幾月も粘り強く探し求め、尋ね歩いた末にようやく、日本的生活様式の生粋の輪郭がふたたび可視的なものとなった。現在が太古以来の歴史にそのまま連なっていることが生き生きと感じ取れるようになった。そして、首都に保持されている連綿とした天皇制の伝統が、あるいはまた芸術と習俗の、歴史をつらぬく一

貫性が、なぞめいた魅力とともにわたしの眼前に開けてきたのだ」(11)。ジンガーは自分が滞在する異国の文化と徹底して取り組み始めた。その際かれは日本を、幾度も幾度もくりかえし文字の書き重ねられた一枚の羊皮紙に見たてている。かれはいわばみずからその解読作業を行ったのである。ギリシア的精神によってはぐくまれたこの人物は、その過程で、いくつかの思いもかけなかった発見に導かれる。日本の神話のなかにはギリシア神話にきわめて類似したものがあること、これにまずかれは驚かされた。生命力あふれる巴(ともえ)の文様は、クレタあるいはさらにそれ以前の時代に由来する絵模様が逆向きにされたものであることを、かれはながい探求の末につきとめたのである。また、鎌倉の秋祭りで見にしたお面に、れかはギリシア神話のデメテルとパオボの先行形態ないしその模倣を認めた(12)。最も好んで訪れた奈良の正倉院、かの天皇家の放物庫でも、かれはヘレニズム伝来のもの、あるいはその影響下にあるものを探し求めた。ただしかれは造形芸術よりも日本の詩歌に一層直接的な愛着を覚えていたようである。それはかれにとってこの国の魂そのものと感じられた。みずから人に就いてその朗詠法を習ったほどである。そんなかれにとって、-- 国際連盟の前事務総長である新渡部稲造のはからいによって-- 宮中での新年の歌会始めに招かれたのは、まさに日本滞在中最良の日であった。

日本の文化・歴史に関する研究を踏まえつつジンガーは、そこから翻ってヨーロッパ精神・ヨーロッパ文化の基盤をなす原理についてもあくことなく思索をめぐらし続けた。かれは、自身書いているところによれば、おりおり「魔法をかけられたような実にやすらいだ気分、あたかも世を捨てた仏教徒のように、瞑想のなかでこころを遊ばせ、霊どもと語らった、-- ただし、沈思熟考してたのはお経ではなくてプラトンの対話篇であったわけだが」(13)。日本における指導的な哲学雑誌である『思考』にかれはプラトンに関する研究論文を発表している。それは、ヨーロッパ精神の伝統をさかのぼり、その真の根源がどこにあるのかを明らかにすると同時に、当時一般に流布していた考え、すなわちヨーロッパの偉大さは主として技術的な分野に存するという主張を論駁せんとしたものでもあった。同様の意図で1935 年にはプラトンに関する研究書が日本語訳で発表された。これの基本思想は『始祖プラトン』から採られているが、日本人読者を意識して力点の置き所など新たに手が加えられている。その序文をジンガーは「鎌倉盆地の風雅な日本家屋で、まわりの末がたてるさわさわとした音を耳にしながらか、」  
「冴え渡る孤独のうちに」書きおろした。そこには次のように記されてある。「プラトンへの沈潜によって、あらゆる人間、ひいては、みずからの内なる声に耳を傾けることのできるあらゆる民族は、言葉の最も本来的な意味で新たなエポックへと踏み進むことになる(エポック はここで転生の謂であり、たんに時期を意味するのではない)。東洋は、いいかえればそこで指導的立場にある者たちは、プラトンを源流とするこの異質な世界にあえて身を投じて、それを統べている条理をひとたびはわがものにし、しかも、古来培われてきた自分たちの伝統・叡智、その由緒ある遺産を、はるかに危険と緊張とに満ちたこの西洋的な存在様式のるつぼのうちへと投げ入れるだけの覚悟ができているだろうか。自分たちの知性と感性との最良の部分を純化するために、そしていまよりも一層生産的な、のびやかな態度でそれを再びわがものとしうるために、あえてそうする覚悟が。これこそは、東洋の人間が態度決定を迫られている、

歴史的にきわめて重要な意味をもつ問題なのである。これに比べれば、今日あれこれの主義の名のもとに、国家間、階級間、党派間を問わず騒々しく続けられている紛争や闘争の帰趨（きすう）などにほどのことでもない。わたしはこの書物を、客員教授としてわたしが教鞭をとった東京帝国大学でのこの4年間、そうすることが必ずしも容易なことではない時代状況のなかで、こころからわたしを慕いわたしのもとにとどまり続けてくれた少数の日本人学生に、そしてかれらと同じようなこころをもってわたしの思想を自分自身のうちに迎え入れようとしてくれている少数の未知なる読者に捧げたいと思う」（14）。

ジンガーがそのプラトン書を、自分を慕ってくれた学生たちに捧げていることから、われわれは、当時かれがその人生のきわめて苦渋に満ちた一時期にあったことを察することができる。ドイツではこの間、ナチスが政権を手中に収めており、ハンブルク大学はユダヤ人であることを理由にかれの教授資格を剥奪していた。すでに東京大学もかれをそのまま職にとどめておくことができなくなっており、当初の契約期限（1935年春）が切れた時点での解雇は必至であった。ナチスのユダヤ人迫害政策はその魔手を日本にまで伸ばしはじめていたのである。日本人からのそれ相応の処遇、援助など、母国から――たとえその理由が不当なものであるにしても――追放された人間にはもはや望むべくもなかった。それはジンガーにとってつらく厳しい体験となった。

失職後かれは中国への旅に出た。滞在は3ヶ月に及び、その中国との比較を通してかれは、日本に関する貴重な認識を新たに増すことができた。1年ののちには、幸運に巡り合わせによって、仙台にある第二高等学校〔旧制二高〕のドイツ語教師の口が見つかった。評判の高い有名な学校でのポストであるとはいえ、それまでのかれの活動範囲に比べればこの新しい職もはやり一種都落ちの感は否めない。かれに課せられたのはいうまでもなくドイツ語の授業であって、持てる深い学識を十分に発揮できるような可能性はきわめて限られていたのである。かれのもとで額に汗しながらドイツ語を学んだ若い学生たちのなかで、自分たちを教えているこの人物の真価をわずかながらでも感じとることができたのは、ほんの一握りの者にすぎない。それでも、このドイツ語教師が力をこめて「Denken! Denken! Denken!（頭を使って考えるのです! 考えるのです! 考えるのです!）」（15）と叱咤するときの真剣さは、今でも多くの教え子たちの記憶に残っている。ジンガーは当時を振り返りながら、「その心の若々しさ、聡明さはおりにふれてわたしの喜びであった」とかれら仙台の学生について好意的な物言いをしている。それまで気づかないでいたことで自分の日本理解をより深め完全にするのに役立つような経験をかれは積み重ねていった。「戦前の旧制高等学校では、新入生――年齢としては17歳から19歳のあいだ――は、太古の成人式を思わせるような儀式的洗礼をいくつか受けなければならない。まずは、一風変わった夜の散歩。墓地とかそうでなくとも、とにかく薄気味悪い場所が選ばれる。行く手には、おどろおどろしい幽霊に扮した先輩にあたる学生たちが、後輩の到着をてぐすねひいて待ち構えているという案配である。これに類した肝試しのたぐいはほかにも行われる。また、夜のしじまを破るアルカイックな輪舞が寮の居室において始められたりもする。同級の学生が集り、上半身むきだして互いに肩を組みあい、大

声で歌いながらぐるぐると円を描くのである。かれらは、しまいにはふらふらとよろめきながら、兄弟愛のきずなに堅く結ばれているという思いからくる忘我的な一種の恍惚状態に引き込まれていく。それは、出身も出自もさまざまに異なる若者たち、往々にしてきわめて内気な若者たちを、一つの分かち難い全体へと融合せしめるのだ。入学当初は孤独で郷愁の思いばかりが募っていましたが、ストーム - - かれらはくだんの輪舞をこう呼ぶ - - を経験してからはそういうことがなくなりました、とこうわたしに語ってくれた学生は少なくない。これはつまり、日本人の生活にあって、高等学校の同級生という間柄ほどに強固な結び付きはほかにはなかったということなのである。その結び付きの強さは中学校のそれをもはるかにしのいでいた。同級であった者が苦境に陥っているときにはその内容がなんであれ決して援助を惜しまない、卒業生はすべて例外なくそのことを暗黙のおきてとして自明視していたのである。この相互扶助の精神は、身内の者に対するのと同じどころか、場合によっては身内をさしおいてでも発揮されるほどのものだったのである。高等学校で培われる友情がこのように特別な性格を帯びてくるのは、昼寝をともにする文字通りの共同生活 - - そのなかで若者たちは、俗事にまみれた不透明な現実から遠いところで、自由に本を読み、思索し、あるいは逍遙に時を過した - - によるところが大きいのであろう。万事ご都合主義が支配する、と評されることもある日本人の生活において、ただ一つ、高等学校の同志的結合だけは絶対的な意味をもっていたのである」(16)。

たしかに仙台に住むジンガーは、この国の政治・経済・文化の中心から遠いところにいたことになる。だがそれでも、新しい環境でかれは持ち前の旺盛な知的好奇心を発揮し、地方とか田舎とか呼ばれる場所に生活するからこそ初めて見えてくるようになる、そういう日本の側面への理解を深めていったし、そこで得られた心のやすらぎは、自己の内面への沈潜、あるいは静かなる省察といったものを可能にしてもくれた。「高潔な精神と詩人的魂をあわせも世捨人であり、仏僧にして風流人でもあった兼行法師」、吉田兼行という名でも有名なこの14世紀の人物は、一種隠棲の生活を送っていたジンガーの目には人生の手本とすべき人間に映った。かれの手による随筆『徒然草』は、日本の古典のなかでもジンガーが最も好んだ、かれにとって座右の書だったのである。「この齡 50 になる独身の男が、人との行き来きのようなものをほとんど欠いていたにもかかわらず、決して精神の生き生きとして輝きを失わずに日本についての多方面にわたる知識・関心を広げつづけていたのは、まったく驚嘆すべきことであった」(17)とカール・レーヴィットは述懐している。

ジンガーがいぶかしく思い、またいささか失望もしたのは、田舎においてすら民族の宗教的伝統がその澆刺とした力の多くを失ってしまっているといいうことであった。ジンガーは書いている。「この仙台の高等学校でも、熱病にとりつかれたような30年代後半の民族主義的風潮にもかかわらず、日本の神話の宝庫である『古事記』、天皇の命によって編纂されたこの書物について生徒たちはほとんどなにも知らないに等しかった。わたしのお手伝いさんとか農家の娘さんとかにその地域の風俗や伝承について尋ねても、おばあさんならばなにか知っているかもしれませんが...、といった答えしか返ってこない。彼女たちの母親の世代ですから、その時代のこと、今様のことしか知らないのである」(18)。

国家社会主義ドイツ教員連合の日本支部は、一切の教職からジンガーを締め出すよう日本側に圧力を加えていた。それでも仙台では、そうながいことではなかったが精神上的な自由な雰囲気はまだいくぶんは保持されていた。やはりユダヤ人であるレーヴィットが教師職を得て、同じ 1936 年にこの地に移り住んだことは、広く知られている。このレーヴィット夫妻と、ジンガーはそれなりに親しく交際を続けた。とはいえ、そこから二人の間に親密な信頼関係が芽生えることはなかった。両者は本質的なところではなほだしく人間性を異にしていたので、その関係も根本のところでは緊張をはらんだものだったのである。自分がドイツ籍のユダヤ人であるということをどう考え、それにどう対処するのかという自己理解の問題でかれらは一致していなかったし、政治的見解においても総じて両者のあいだにはかなりの隔たりがみられた。ジンガーは、どちらかといえば保守的でありドイツ人であるという側面を日本において強調した。他方、故郷を追われたレーヴィットは、ドイツに対して根深い懐疑の念を抱いており、自分がユダヤ人であることを隠し立てなかった。ナチスの政権掌握の現場に居合わせなかったこともあり、ジンガーは、生成しつつある「国家」という、ゲオルゲに発する理念を捨てることはなかったし、自身のプラトン理解に強く影響された国家理念をずっと保持し続けた。実際、貴族主義的・エリート主義的な考え方から、かれは党派的なもの、あるいは近代の大衆民主主義に対して容赦ない批判を加えている。こういったことから、ジンガーは民主主義に対する根っからの敵対者だ、という印象を人に与えることにもなったのである。戦時中 1940 年に書かれたこの覚書のなかで - - アメリカ合衆国で書かれたこの覚書はながく見失われたままだったが、最近になってようやく発見され、時を移さずに一冊の本として出版された - -、レーヴィットはジンガーにみられる「英雄的な偉大さへの傾斜」と「プロイセンまがいの立ち居振る舞い」を非難し、その「政治上の倒錯」をとがめ、さらにはかれを「ファシスト」と断じ去っている(19)。困難な時代にあったことを思えば、ここでレーヴィットが必ずしも憤激なく偏頗なく書いているわけではないことは確実であり、かれの手厳しい批評を鵜呑みにすることはできない。突っ込んだ吟味には堪ええない類いのものなのである。愛国一辺倒のその心情はたしかにレーヴィット(およびその他のひとびと)をいらつかせもし、誤解の種を植えつけることにもなったであろうが、ジンガーとてレーヴィット同様に、批判的精神に大きな価値を認める、思慮深いひとりの知識人だったのである。レーヴィットは次のように書いている。ジンガーは「英雄とか豪傑とか称される歴史上の人物にゆかりのある土地を好んで」訪ね歩くような人間であった。「神話」と「英雄的なもの」とに関する講演を日本に行ったのがかれではなくて反ユダヤ主義に凝り固まったナチ党員であったのは「ただの偶然」にすぎない、 - -。だがこの主張にはどうも不当な言いがかりの感が否めない。それというのもこれは、ジンガーを事実反してナチのイデオロギーに直接結びつけようとしているだけでなく、日本の歴史・文化・宗教・神話に対するかれの真摯で幅の広い学問的関心について重大な思い違いを犯しているからである。当時ジンガーが書いたもの - - たえば岩波書店から 1939 年に出されたアンソロジー『古代日本の生活』など - - を目を通すと、そこではレーヴィットの証言とはまた違った人物像が浮かび上がってくる。資料的価値も備え持つこの本は、日本人の専門家、とりわけ東北大学の教授たちとの緊密な共

同作業によってできあがったものである。ジンガーの研究活動のもつ広がりと深さをレーヴィットが見抜けないほど、それほどまでに両者の間には「行き来」(注 17 参照)が欠けていたとでもいうのであろうか。それにまた、レーヴィットが別のところではジンガーを指して「機知に富み感受性の鋭い優れた人物」とか書いているもの、「ファシスト」なるかれの人物像にはどうもなじまない。あれこれ総合してみると、ひょっとして次のようなことだったのではないだろうか。すでにジンガーは二度も(ハンブルクと東京で)政治的な圧力によって職を失っている。レーヴィットにいわせると「きわめて小心な面をもつ」この人物は、仙台でも再び同じ目にあうことをおそれた。それでかれは自分の身を守ろうとして、あえておおげさにドイツ人であることを強調し、日本およびドイツの政治に対する批判を差し控え、無理に威勢のいい外面を取り繕っていた、というようなことだったのでは - -。

とはいえ、このドイツ人の同輩に対するレーヴィットの無慈悲でもあり矛盾も含んだ評価の相当部分は、ジンガーの私の強い人柄にその根を求めることができる。ジンガーはどうやら単に強情だというだけではなく、人をいらつかせ、人に冷徹な感じを与える要素をもっていたようなのである。これとの関連で参考になるのは、かれの友人のひとりエド＝アルト・ローゼンバウム証言である。かれはこう書いている。「クルティウスはすでに数年の後にはくだんの精神運動および 国家 に対して(...)批判的な距離をとるようになっており、師たるゲオルゲの指示にも従わなくなっていた。これにはクルト・ジンガーがたいそう腹を立てていたものだ。そのジンガーのほうは一生涯、青年の多感なときにみずから選んだひとびとの 使途 であり続けたのである。ジンガーは一途にかれらに付き従った。そしてこの自分の忠誠・心酔に理解を示そうとしない者たちに対してはけっして心を開こうとはしなかった。かれ自身言明したことだが、寛容なるものはかれにとって、まったくもって許すべからざる態度なのである。生存は調和・和合よりは軋轢・葛藤によって規定されている、と考えるかれにとって、はりつめた緊張関係のただなかでのしのぎの削り合いといったものは人生の常態以外のなにものでもなかった。だがもとよりそういったことは、回りの者たちにとってはジンガー自身が思うほどに自明なことではなかったのである。とはいえ、この固い鎧の隙間越しには、かれの人間的な魅力が、あるいはまた 喜ばしき学問 にも通じる精神の輝きが見て取れた。そしてよわいを経てからは、多くの友人たちとの付き合いも影響してか、人間にもだいぶ丸みが出てきた。そのころには、一般に人生には付き物の一種間の抜けた情熱といったものに対しても目が開かれ、苦笑しながらもそれを許容するという人間的な余裕も備わっていた。人一倍負けん気の強い、ぴりぴりとはりつめたような以前のかれには望めなかったことである」(20)。ジンガーが生徒たちを教えるにあたって最も意を用いたのはかれらの学問的探求への情熱とみずから考える能力とを可能なかぎり強固なものにするということであった。それでかれは、かれらの感情を害することも厭わず、論理的な思考が十分でないことや一般的な教養に欠ける点があることなどを祈りにふれて生徒たちに指摘した。なかにはこのことからかれに対して反感を抱く者もでてきた。不穏な政治状況もあいまって学校での不協和音は日増しに高まっていった。国家主義のプロパガンダの暴威が公的な場面においても厳しさを増していること、それによってひとびとは徐々に判断力を麻痺させられ

偏狭さの虜になりつつあること、これをジンガーは身にしみて感じさせられた。「日本は、自然にさからって、魅惑的な蝶からこわばった醜い幼虫へと退行しつつあるかのようにわたしにはみえる」(21)。1938年に日独文化協会が締結されて以降、日本の文部当局はナチズムの支配するドイツに同調して反ユダヤ主義的態度をとるようになった。1939年春、ジンガーは、教育者としての適性に欠けるという口実で解雇された。この非難は疑いもなくこじつけにすぎず、 - - ジンガーが批判者たちに抗議してはっきり述べているように - - 人種政策に根差す真の動機を粉飾するためのものであった。とはいえ、かれが根っから語学教師に生まれついたような人間ではなかったことも、事実である。かれはその気質において一貫して大学教師であり続けた。そのためにかれはときには、自分の生徒たちのことを思うまったくの善意からであるにしても、かれに過大な要求を課すこともあったのである。よくない教師、という烙印は、感じやすい良心的なこの人物の心を深く傷つけた。解職を前にした最後の数か月の間、かれは - - 幾たびまんじりともせず眠れない夜を明かしたことが。

政治的状況の進展は、このようにしてかれの運命を組み敷いていった。かれにすぐ続くようにしてレーヴィットも仙台を去らなければならなかった。当時を回顧してジンガーはこう書いている。「つらいこともあったが楽しいことの多かった3年を過ぎた時点でこの仙台での堡壘(ほらい)も国粹主義者によって奪われてしまった。かれらは、ドイツで行われているのと同様に、思想・文化の画一的な統制を声高に主張している。東京に戻ってみると、ヨーロッパ人がもはや呼吸できないような空気がそこには満ちていた。かつては異国の者に対してあれほど好意的であった国が、今では常軌を逸した邪悪な精神と見境のない猜疑心とにとりつかれていた。危急存亡の秋(とき)とばかりに勢い込んでいる者たちには、ただ外人がいるということだけで自分たちの根底的基盤が掘り崩されてしまうように感じられるらしい。いったい誰がほんとうの仲間なのか、誰が敵なのか、もはや区別できなくなっているのだ」(22)。

ヨーロッパに戻りたいという願いは実現されなかった。マルチン・ブーパーが教鞭をとるエルサレム大学に職を求めたが、これもだめだった。イギリスに移住するのはよした方がよい、とケインズは忠告してきていた。かくしてジンガーは、第五大陸たるオーストラリアに庇護を求めることになる。日本を離れる日、身を切られるようなつらい思いに胸は満たされた。だがそれでも、苦悩に押し潰されてしまうようなことはなかった。みずからを恃む持ち前の剛毅さを支えに、ジンガーはこの愛する国に分れを告げた。「1936年秋、悲喜こもごも多くのことを経験もし学びもした8年を越える滞在に終止符を打って、わたしは日本をあとにした。行き先は、赤道を挟んで地球の対極に位置している。ヴォルフスケールがわたしよりも一足先に行っている所だ。わたしの乗る船が最後に停泊した日本の港は長崎だった。ここは200年にわたって、日本と西洋とを結ぶ唯一の接点であった場所だ。かつてわたしはここを訪れ、わたしの先人にあたる人々のこけむす記念碑を詣でたことがある。この国に学問的な関心を抱き、その歴史や文化・習俗を西洋人としては初めて探求した人々、 - - ドイツ人であるエンゲルベルト・ケンブアー(1651-1716)とフランツ・フライヘア・フォン・シーボルト(1796-1866)、そしてスウェーデン人ペーター・フォン・トーンベルクである。だがその最後の寄港のときには、わたしはもう船から外

に出ることをしなかった。街路と、そのそこここに点在する寺院は、なにか怪しげな呪いにかけてしまっているかのように、魔性のものの手に陥っており二度と足を踏み入れてはいけない場所になってしまっているかのように、なぜかそんなふうに見えたのだ。自滅への未知をひた走る黒装束の者たちによる支配が、ここでもすでに始まっていたのである。 - - とはいえ、美しい形をした広やかな入り江は、沈み行く日の光に照り映えて、実にしっとりとした深みのある、それでいてあくまで透明に澄んだ幾通りもの色に染めあげられていた。それはあたかも、海底深くにあるといわれる伝説上の御殿からその秘められた財宝の金色（こんじき）の輝きが水面にまで達し来ているかのようなようであった。そこに並んで停泊している船の一群は、花器に生けられた花木からかつてわたしが感じ取った、あの生き生きとした律動的な形式美をいま一度思い起こさせた。いま思い返してみると、この別れの愁然たる時に臨んで忽然として胸に迫ってきた感情は、そのずっと以前に感じたことのある、だがそのまま忘却のうちに沈みこんでしまっていた、そういう感情だったのだ。あの偉大な詩の一節によって喚起されたたとえようもない孤独、第七の孤独。その詩の調べに接することによって、14歳の少年は詩の世界へと踏み入ることになったのであった。

わが峯々の氷はなおも燃えているか？

しろがねの、かるやかな、魚（うお）さながら今わが小舟は泳ぎ出てゆく……（23）

はるばる移り来たオーストラリアではあるが、糊口を求めて逃れて来たこの人柄が両手を広げて迎え入れられるというわけにはいかなかった。大戦の開始からまだ数週間しかたっていないときに入国したかれは、敵の一員ということでそのまま2年間にわたって収容所生活を送らねばならなかったのである。その後でようやくユダヤ人亡命者としての法的地位が認められ、自由を取り戻すと、ジンガーはある学術奨励金を得てさっそく研究生生活を再開する。そのときの研究活動の成果が、1949年にメルボルンで出版された『相剋の生』である。これは、ジンガーの成熟した思想を伝えるきわめてすぐれた著作であり、そののち1973年に、ドイツ語で書かれた社会学・経済学関係の論文のいくつかを加えてドイツで復刻されている。ちなみにジンガーはこの著作を、「相剋のなかでの20年にわたる情誼に感謝して」（24）という言葉添えてマルチン・ブーパーに捧げている。対立と抗争は、この著作において、社会的諸条件や経済的状態の単なる結果にすぎぬものとしてではなく、人間の本質・根源に深く根差した根本的事態とみなされている。

それと平行してジンガーは終戦にむかう数年のあいだ、日本を主題にすえて一冊の本を執筆していた。それは、数多いかれの著作のなかでも疑いなく最もすぐれたものである。この代表作『鏡・刀・宝玉』は、 - - かれ自身の要約を引けば - - 「心理学的社会的かつ文化史的観点からする、日本の特色についての包括的研究」（25）である。かれはこれを英語で書いているが、それでもかれの思考の様式、その基盤は本来ドイツ的なものであった。いずれにせよ、この日本書で戦争後の時局に直接的な影響力を及

ばすことができるだろうというかれのひそかな期待は実善せず、したがって、諸国民の間に平和な政治的・文化的共存関係を打ち立てる作業にそれによって貢献したいという願いもまたかなえられることはなかった。イギリスの出版社は自国での紙不足を理由に出版を承諾しなかったし、アメリカ合衆国からは、日本を主題とした本など、とくに学問的にしっかりした本格的な論考のようなものなどは今となってはもう「遅きに失している」(26)と言ってよこした。かの地のひとびとは日本についてのことなど――ジンガーの感じ取れた限りでは――、「とにかくできるだけすばやく無意識の世界に押しやってしまいたい」と望んでいるかのようであった。かれは50年代前半にドイツの出版社へも草稿を送っているが、やはりそれも徒勞に終わった。ドイツとともに呪うべき負けいくさを戦った極東の島国、その文化や生活のありように対する関心は、当時きわめて薄いものでしかなかったのである。1973年になってようやく『鏡・刀・宝玉』はロンドンで出版に付された。そしてそれは識者の間でかなり評判となった。著作が書かれたときからすでに幾年も経過していたわけだが、そこに盛られている見識の正しさ、新鮮さ、説得力はほとんどそのことを感じさせなかったのである。「すばらしい」、とロンドンの『タイム』は称賛している。だが、後年自分の著作が博したこの成功を、ジンガーは生きて目の当たりにすることはできなかったのである。

戦後オーストラリア当局は、イギリス連邦に帰化するかさもなくばオーストラリアを去るかという二者択一をかれに迫った。そのときかれは心を引き裂かれる思いで前者の道をえらんだ。自分と故国とをかるうじてつないでいた最後の形式上の結びつきすらも失うことになったわけである。そうしてかれはシドニーに定住することを許され、すでに60を越えた歳で再びアカデミズムの世界に戻ることになる。サウスウエールズ大学がかれに非常勤講師の口を提供したのである。のちに常勤講師となり、かれはそこで70の歳まで勤めあげた。だが「並外れて外向的・開放的気質の支配するこの国」に、かれとしてはかえってなじむことができなかった。当時書かれた詩の一つでは、荒涼としていつになってもよそよそしいままの土地や香りに乏しい庭々について語られている。「ペーパーテスト中心の教育に偏している学部のあり方」に順応するのめかれにとってはなまやさしいことではなかった。日本で味わったような知的刺激に満ちた対話がオーストラリアでは不可能だった。それゆえ、ゲオルゲ・サークルに属する友人のひとり、ハインツ・ブラシュが、境遇を共にする同行者として1952年までメルボルンに住んでいたことは、この孤独な学者にとってなによりの慰めであったろう。また、ジンガーが『鏡・刀・宝玉』を捧げたカール・ポルフスケールは、1948年に他界するまで隣のニュージー・ランドで生活しており、ふたりは手紙を通じて接触を保っていた。

停年を迎えて大学を去らなければならなくなったとき、フリードリッヒ・リスト協会が友人関係にあったゲオルク・フリードリッヒ・クナップとフリードリッヒ・ベンディクセンとの間の往復書簡の編纂をジンガーに依頼してきた。これは西ドイツ大統領のテオドル・ホイスの斡旋によるもので、かれはこの仕事にその後1年のあいだ従事した。1957年の秋、かれは第五大陸をあとにした。実にあしかけ26年ぶりに、かれはそれでもこだわりの感じさせないあくまで淡々とした足取りでふたたびヨーロッパ大

陸の土を踏みしめたのである。その気になれば退職教授としての権利と年金とをハンブルクの市当局に申請することもできたが、かれはこの古里にながくとどまることをしなかった。かつてハンブルクに住んでいた妹の消息はまったくつかめなかった。彼女はリッツマンシュタット強制収容所に連れ去られており、そこで殺されたにちがいがなかった。ほかに係累と呼べるような人間は、この生涯を通じての独身者にはいなかった。病を得て一時期スイスとローマに滞在したのち、運命の厳しい試練にさらされ続けたこの人物は、終の住処（ついのすみか）を、かのあこがれの国、ギリシアに求めた。ギリシアについてかれは 1934 年に東京でこう書きつづけていた。「この、一種寂寞とした風土の国は、一個の灯台なのである。精神的出来事に満ちた 2000 年以上にわたる輝ける歴史を誇るこの灯台は、その間いまにいたるまで一貫して、航路を見失いかけた舟にその行くべき方向を指し示す光を発し続けてくれている。その光りはつねに希望の糧であった」(27)。アテネの港に船が着岸したとき、かれはギリシアにむかって「わが第二の 神々の国 よ」と呼びかけたのであった。

かれはその人生において数々の困難を耐え忍ばなければならなかった。運命に弄ばれ、そのつど気を奮い立たせて新たに一から出直さなければならなかった。さまざまな事柄に興味を抱き続け、それに応じて研究分野も多岐にわたっているというだけでなく、遠く異郷の地を転々とせざるをえなかったということもあって、晩年のジンガーには、当然博してしかるべき名声が拒まれていた。忘れ去られた無名の老人としてかれはこの世を去ったのである。しかしながら、クルト・ジンガーはそのオデュッセイアの旅において精神の驚くべき首尾一貫性を示している。かれは、自己のデーモンの声につき従ったのである。ある詩のなかでかれはみずからを 神に駆られた者 と呼んでいる。「かれはみずから自分の人生をひとりの英雄の旅路に見立てていた」と、エドゥアルト・ローゼンバウムは伝えている。「精神的な使命を果たすべく詩人の天分と法官の厳格さを授けられた英雄の旅路に」(28) - - 。不本意なことの多かった人生ではあるが、ジンガーには、ごく限られた少数の者にだけ許されるような精神的充足というものが与えられていた。かれの詩のひとつに、この 充足 というタイトルがつけられている。本校の題辞として筆者が引用したのは、その冒頭部である。それに続く部分を以下に引用するとしよう。

荒れ野にも緑が萌えいで  
燃え立つ炎  
祭壇がしつらえられたのは  
聖なる小川のほとり。  
さざめく声がかれの身をつつみこみ  
いつしかひとつの歌につながった。  
慈愛の手にひかれ  
門へと到りつく。  
嵐が吹きすさぶなか

戦いと裁きは行われた。  
夜ごと現れいでたのは  
神のまなざし  
はるか星々のもとにまで昇りつめ  
水晶となって降り来たった。  
少年よ、汝、夢追い人よ  
万物は汝の眼前にある、しかと見よ。

年齢からくる体の不調には悩まされながらも、ジンガーはさらに数年の間ささやかな幸福の時をもちえた。かれはギリシア各地を旅して歩いたし、また考古学や数学、経済学の研究に没頭することもできた。こうして 1962 年の 2 月 10 日に、かれはアテネでその生涯を終えたのである。アテネの郊外、地平線にアイガレオス山地が望めるユダヤ人墓地に、かれはいま眠っている。その質素な墓石には、かれの名前の横に、ダビデの星がひとつ彫り込まれている。

ジンガーの日本書は、書かれてからすでに数十年を経ているが、その価値を失うことはなかった。すでにして一個の古典的著作なのである。この『鏡・刀・宝玉』こそは、今世紀に西洋人が著したこの種の研究書のなかで最も透徹したものだ、との称賛の声は絶えることがない。1981 年に東京の講談社インターナショナルから、1973 年にロンドンで出版された英語の新書版が復刻された。原本の編集にあたったのは、オックスフォードの有名な日本学者であり歴史学者でもあるリチャード・ストリィである。内容についての批評を求めて送付されてきた草稿に目を通すや、かれはこれが深い洞察を備えた独創的な著作であることをただちに見抜いた。かくしてこれが一冊の本として出版されるに至ったのは、かれの功績である。だがかれは出版上の配慮からかなり大幅に、しかも往々にして恣意的な仕方では省略を行っているため、ジンガーのもともとの草稿がもっていた価値の本質的な部分がそれによって少なからず損なわれることになってしまった。いかにも興味をそそる、通りのよい副題、日本的生の幾何学 は、ストリィに由来するものである。おそらくジンガー本人はこのような題を思いつくことはなかったであろう。というのも、かれは日本を、幾何学的なアプローチではうまくとらえることのできない一なる有機体とみなしていたからである。そのため、草稿に忠実な信頼するに足る新たな版が待ち望まれていた。この度それがかなえられ、今年 1988 年中にフランクフルトのズーアカンプ社から新版『鏡・刀・宝玉 - 日本的生の諸相 - - 』が出版されることになっている。これは、ジンガーが 1950 年にシドニーで書き上げた英語の完全原稿に依拠したものだが - - ちなみに新版ではジンガーの母国語に訳し戻されている - - 、大半が散逸してしまったドイツ語の草稿のなかでかろうじて失われずに残った部分やその他の断片も場合に応じて取り入れられている。

序文から一部引用してみたい。「ジンガーがこれを執筆するにあたっては、経済学や社会学、あるいは神話学や文化人類学といった分野でのかれの広範な知識がものをいっただけではなく、その思索的な性

格、芸術一般に対する感受性、さらには叙述における筆の力といったものがその本領を發揮している。かれは、- - リチャード・ストリィが適切に述べているように - - ひとりの詩人の心をもった経済学者であった。かれは、明敏な洞察力と研ぎ澄まされた知性の持ち主というだけではなく、具象的造形的なものに対する繊細な観察眼、秀でたセンス、そして物事の深奥を照らし出す直感力といったものも身に備えていた。だからこそかれは日本的生のさまざまな相に分け入っていくこともできたのである。かれはあるときは歴史学者のように、またあるときは文化哲学者、宗教学者のように書き進む。そしてその間をぬうようにしてくりかえしくりかえしかれにあって詩人的なものが姿を現してくる。扱われる対象はそれによって、陰影を伴った一層明瞭な輪郭を浮かびあがらせるようになるのだ。ジンガーは主題に対して細心の注意を扱う。それはたとえば、つづら折りの道を一步一步登っていくのに似ている。その場その場の見る角度やまた高度によってそのつど新たな眺望が開かれるが、それでいて、眺めやられている対象はなにがしか不変の恒常的な相貌を呈し続けているのである」(29)。

日本の精神に対するジンガーの称賛するすくなからぬ部分に - - たとえば、英雄的なものを強調するとか歴史の起動因として天才を高く評価するとか - - 、われわれはゲオルゲの影響を見て取ることができる。ジンガー自身の言葉を引いてみよう。「わたしが日本人のうちに見いだしたのは、大げさを嫌い、無駄のないきりりとした立ち居振る舞いを好む心である。これにわたしはきわめて共感できる。また、沈黙に向かおうとする心、さらには、沈黙そのものに化してしまいたいと願う心もわたしはかれらのうち見いだした。それは二重の意味をもち、恥じらいを知るがゆえにことさらに無愛想を装わんとする心であるのと同時に、激烈な苦痛にあっても沈着さを失うまいとする心でもあるのだ。これはつまり、原初の純朴さに感応し、英雄的な忍苦をたつとぶ、そういう心なのである」(30)。しかしながら、ジンガーを - - ストリィがそうしているように - - もっぱらシュテファン・ゲオルゲとの緊密な結びつきからだけ理解しようとしてはならない。それでは、学者であり作家でもあったかれのある一面だけをとらえたことにしかならないからだ。かれの視野はきわめて広く、 - - 主だったところを挙げるだけでも - - プラトンからゲーテをへてニーチュ、ジンメルにまで及んでいるのである。『鏡・刀・宝玉』は、かれが多方面にわたる深い教養を備えたひとりのヨーロッパ人であったことを証している。ジンガーは、師であるジンメルについてきわめて高く評価したその「目配りのきいた鋭い観察眼」をみずからも分け持っていたのである。かれについて次のように述べるとき、カール・レーヴィットはまったく正しい。「かれが サークル において獲得した叙述のスタイルは強烈なパトスに溢れているが、かれ本来の人柄からいえば、むしろジンメル的な思考のスタイルのほうがかれにははるかに自然なものだった」(31)。アンリ・ベルクソンの哲学 - - とりわけ 1932 年に出版された著作『道徳と宗教との二源泉』 - - がジンガーに感銘を与え日本人の社会生活に備わる独特の形式に対してかれの目を開かせたということ、このことは従来顧みられることがあまりに少なかった。知性に由来する個人中心の思惑や行為につきものの身勝手さに歯止めをかけ、悟性の発するただひたすらに眩しい光をやわらげ、「集団」に根差す道徳・宗教を優先させる、そういった機能を果たす潜在的な本能というものが神話や迷信のうちには息づいている

のだ、とこうみる点でジンガーはベルクソンと考えを共にしていたのである。そしてかかる太古の原初的な力・状態を生き生きとしたままに保持しておくということに、この国はそのながい歴史を通じてつねに一貫して心を用いてきた、というこの点がかれには日本の大きな特色をなすように思われた。『鏡・刀・宝玉』に付された序言ではこう言われている。「この独特の保持し続ける能力、持続の才能のうちにかれは日本の偉大な、比類ない歴史的伝統を見て取った。自己一点の芯にすべてが収斂する生、この日本の生に備わる本能的確実性をかれほどに透徹した仕方と言葉にもたらした者はほかにいない」(32)。

その日本書とともにジンガーはいま再び故郷ドイツに戻って来た。他に例をみない経済発展に成功した国をその心の基本的ありようとか精神の深層構造とかいった面から理解してみたい、そう考えているひとびとは、今日増えてきているのではないだろうか。 - - また仙台でも、新たにクルト・ジンガーを思い起こすべき十分な理由があるように思われる。この町とドイツとをつなぐ独自の精神的結びつきが話題になるときは、日本人もドイツ人も誇りをもって、東北帝国大学に奉職した二人の高名なドイツ人に、すなわちオイゲン・ヘリゲルとカール・レーヴィットに言及するのを常としてきた。数十年このかたずっとそうであった。だが今後は、第二高等学校で教鞭をとった、『鏡・刀・宝玉』の著者も忘れてはなるまい。仙台とドイツとの伝統的な交流関係に話がおよぶときには、第三のすぐれたドイツ人学者を躊躇することなく付け加えなければならない、そうわたしは考える者である、 - - ヘリゲル、レーヴィット、そしてジンガーと。

(鈴木崇夫訳)

〔校正の最終稿の段階で原文に変更が施されたため、原文と訳文との間に一部異同があります。筆者ヴィルヘルム氏によれば、いずれにしても内容上の問題はなく、訳文については変更には及ばない、とのことでした。(訳者)〕